現代社会フォーラム　No. 10, 54-57（2014）

《書　評》

# セルジュ・ラトゥーシュの脱成長ユートピア論の射程

長　岡　延　孝

## 1　ポスト開発論の首領

近年，幸福概念や豊かさの再定義が多方面から進められている。その背景として，物質的生産力と幸福感の乖離，自然環境と資源・エネルギーの限界，さらに市民社会の自律的な成熟などが考えられる。真の豊かさを控えめなエコロジカル・フットプリントで実現できる，従来の成長観に囚われない社会発展の在り方が模索されているのである。

フランスの経済哲学者であるセルジュ・ラトゥーシュは，経済成長に対するラディカルな批判者として知られるが，このたび彼の著書が連続して翻訳され，日本への紹介が本格化しつつある。彼は今や信仰と化した経済成長の観念を脱魔術化する必要性を説き，脱成長（décroissance）への転換を提起している。そして彼の望むのは，経済に囚われずに人々の生活や人格が開花できるような，自律的でコンヴィヴィアルな地域社会である。

南北問題と開発経済学を専門とするラトゥーシュは，ポスト開発論者として国際的な研究グループを指導し，フランス論壇の有力論者としても活躍してきた。フランスの知識人らしく思想史にも通じており，広範な学問分野に言及しながらユーモアを持って自説を展開している。近年興隆しつつあるポスト開発学派，あるいは脱成長学派の首領の紹介は，海図なき海を航海する日本社会にとって一つの羅針盤にもなり得るだろう。本稿ではこのたびの一連の翻訳を紹介し，その意義や疑問点などについて考察する。

## 2　著作の内容：成長主義の批判と脱成長ユートピア

前者『経済成長なき社会発展は可能か？』は，ラトゥーシュの２冊の著作（末尾を参照）の翻訳であり，そこで主要な論点と主張が展開されているので，まずこの翻訳の内容について紹介する。第Ⅰ部では，われわれの経済想念は成長概念によって植民地化されてしまっているので，その呪縛からの解放が要請される。工業化以降に現実化した経済成長が社会の追求すべき主な目標となり，主流派経済学がそれを中核に据えてきたのは言うまでもない。逆に，ポスト開発学派のカギ概念である脱成長は，それを西洋による異文化支配として根底から拒否する。また市場経済やグローバル化のもたらす難点を，国家による制御や連帯の論理による経済のハイブリッド化によって安定，救済しても，結局は成長を助長するだけだと批判する。代わりに求められるのは，経済から解放され，地域を基盤にした，イヴァン・イリイチ的な意味におけるヴァナキュラーな（vernacular）社会へと抜け出すことだと主張する。

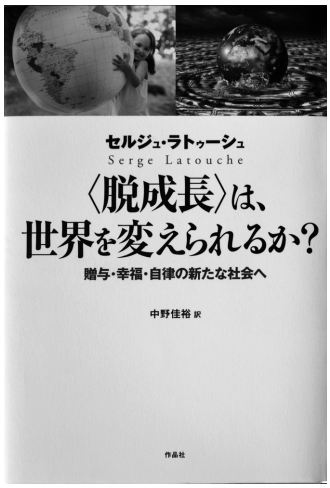
従来型の発展の問題を克服，修正する発展パラダイムに対しても，同じ観点からノーを突きつける。彼が否定的に挙げるのは順に，社会開発，人間開発，地域開発，持続可能な発展，オルターナティブな開発である（第３章）。90年代半ばに国連を舞台に提起された社会開発は，ト

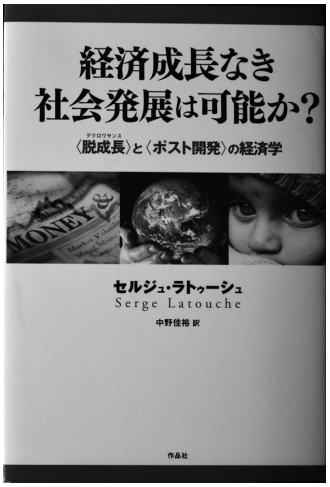
リクルダウン効果を正当化するものにすぎず，また地域はたしかに重要だが開発と結合すれば経済発展を延命させるのみである。このように，発展概念に上記のようなさまざまな形容詞がつけられて婉曲的になっても実態は変わらない，と手厳しい。

第Ⅱ部では，具体的なユートピアとしての脱成長（第２章），およびそれへの政策的側面（第３章）が主に議論される。一般に「黄金の30年」と称揚される第２次大戦後の高成長も，批判的経済学の見地からすれば異常な「災害の30年」と特徴づけられる。脱成長にはアンドレ・ゴルツ，コルネリュウス・カストリアディス，イリイチ，ジャン・ピエール・デュピュイらの先駆者がおり，ラトゥーシュは彼らから影響を受け，その思想を継承しつつ脱成長のユートピアを描いている。

経済成長を目的としない自律社会へと転換させるには，次の８項目にわたる相互依存的な変化（8R）を体系的に進める政治的企てが必要である。すなわち，①価値を再評価する（réévaluer），②概念を再構築する（reconceptualiser），③社会構造を再構造化する（restructurer），④再分配を行う（redistribuer），⑤再ローカル化を行う（relocaliser），⑥削減する（réduire），⑦再利用する（réutiliser），⑧リサイクルを行う（recycler）である（訳2010：第Ⅱ部第２章）。

これら全てが再（re）で始まることから解るように，本来あるべき道筋から外れている過剰な事態の，元の姿への復元が含意されており，既存の成長神話のラディカルな批判となっている。彼によれば，われわれは古いブルジョワ的な価値に基づく社会の中で生きているのだが，その支配的な価値よりも優先されるべき価値がある。すなわち，利他主義，協力，余暇，遊び，生活，ローカル性，自律性，思慮深さ，人間関係といった価値が，上位に位置づけられねばならない（①）。そうなると，世界を別の角度から捉えられるようになる（②）。とりわけ，経済が自然の搾取と商品化によって物質的不足と欲望の創出を導き，本来豊穣なはずの自然を希少性へと転換するのだと批判する。再構造化とは生産装置と社会関係の再調整のことであり（③），南北問題を含む再分配問題とも絡んでいる（④）。脱成長派にとって地域が非常に重要な概念であり，経済，政治，文化の全てが，市民生活を意味づける生活圏に立脚すべきであると主張する（⑤）。最後の，削減・再利用・リサイクルは3Rとして廃棄物政策で受容されている原則であるが，ここでの議論はごみだけにとどまらず，保健衛生上のリスクの削減や労働時間の削減に至るまで，広範な縮減を含んでいる（⑥・⑦・⑧）。



経済成長を目的としない平和な社会は，日常生活における抑圧されたさまざまな次元を回復する。そのような次元として具体的には，市民としての義務を果たす余暇，芸術や職人芸の自由な制作活動，遊び，観照，瞑想，会話，生きていることを素直に喜ぶための時間を想定している。こうした社会こそ願えば可能にもなるユートピアで，その象徴がカタツムリなのが面白い。カタツムリが表徴なのは単にスロー・スピードだけではなく，精妙な構造の殻と行動のバランスを絶妙に取っているという知恵に学ぶ必要があるからである。

## 3　ユートピアへの方向性を強化する政治的企て

ユートピアのより具体的な社会組織はどのようなものか。理想郷は現実批判のための装置として定置されているのか。あるいは，ユートピアの実現を目指すなら，どのような現実との接点や架け橋が可能になるのか。漸進的な戦略もあれば，革命的な断絶によって移行することも考えられる。ラトゥーシュの議論から，当然これらの疑問が湧いてくる。こうした移行の問題に関して，次の翻訳『脱成長は世界を変えられるか？』のなかで，彼は関連する思想にも目配りをしつつより具体なユートピア像を描こうとしている。紙幅の都合上簡単ではあるが，その議論を見ておく。

ラトゥーシュは，国民政府は生産主義を守ること以外には行動しないと見なすので，議会政治には懐疑的である。グローバル・レベルでも同様に，世界官僚が金融市場の独裁を通じて自分たちの意思を押し付け，どの政府も資本の官吏として機能しているという。それでも脱成長への移行を目指し，生産主義に批判的なグループも受容できるような政策案を公表している。それらは次の10項目から成る。すなわち，①持続可能なエコロジカル・フットプリントの回復，②環境税による環境コストの内部化，③諸活動の再ローカル化，④農民主体の農業の再生，⑤生産性の増加分を労働時間削減と雇用創出に割り当てる，⑥人間関係に基づく財の生産を推進する，⑦エネルギー消費を４分の１に削減する，⑧宣伝広告を大幅に削減する，⑨科学技術研究の方向性を転換する，⑩貨幣を再領有化する，である（第３章）。ただし，これらは通常の政策案ではなく，政治的な企てに理論的な一貫性を与えるものだと述べており，その実践的な位置づけにおいて曖昧さが残っているように評者には思われる。

ラトゥーシュの目指す社会像は，地中海的なアイデンティティに裏付けられたイメージによって照射されており，一定の現実的根拠も持っている。すなわち，アルプス以北のヨーロッパはグローバル化した証券取引所や単一通貨ユーロ，商品化，アメリカ化によって特徴づけられるのに対して，南ヨーロッパ諸国は分かち合いの精神にあふれ，より人間的かつ寛容であり，より文化的なヨーロッパである。したがって，そこには連帯，家族の意義，生活の技法，時間と死の観念などの，今日虐げられている価値が生きている。イタリアの新しい自治体ネットワークやスローフード運動やスロー・シティ，アーバン・ヴィレッジも有望であると評価する。近年，経済危機の中で貶められている南ヨーロッパ社会に，逆に可能性を見出せる契機がここにある。このように地中海的な道が脱経済発展パラダイムの道にもなりうる，との展望を抱いている（第７章）。

## 4　思想的に豊穣なもう一つの社会像

ラトゥーシュらの脱成長論に対しては，数多くの疑問や批判が寄せられているのも確かである。彼の運動論は動態的であっても，推奨される社会はやや静態的で牧歌的にすぎるとの印象を評者も受ける。また，豊かさは適度の欲求で

実現可能で，中庸の精神を目指すべきであると彼は言う。古代ギリシャからの伝統を持つ市民的教育の重要性の強調は，評者も同意するところである。ただし，人間の本来的な探求心や欲望に由来するイノヴェーションが社会の動態的発展の原動力になってきたのであり，その制御は容易だとは思われない。

従来の成長主義にしがみつく国家も世界にはまだ多く見られるものの，それが臨界点に達しつつあることは，ラトゥーシュならずとも今や多くの学者や政治家の共通認識となってきている。ただ，それらの内容は百家争鳴なのが実態であり，思いつくままに挙げても，エコロジー的近代化論，内発的発展論，デイリーの定常社会論，内橋克人のFEC自給圏，筆者の与する緑の成長論，ブータンの国民総幸福，タイ国の「足るを知る経済」など多彩である。これらの議論の多くはラトゥーシュによって，結局は成長主義に与するものと批判されるだろうが，それぞれに可能性を秘めている。

ラトゥーシュはこのように幅広くかつ深遠な学識に基づいて，もう一つの社会像を魅力的に描き出している。脱成長論は国際的な学会で一定の広がりを見せ，2008年にパリで学際的な国際会議が開催された。そこにはラトゥーシュ以外にも，ハーマン・デイリーやホアン・マルチネス・アリエといった著名なエコロジー経済学者も主催者として加わっていた。その論文集はダウンロードして読むことができる。同国際会議はその後，隔年で開催されている。

価値観の多様性に乏しい日本のポリティカル・エコノミーにあっては，ユートピア思想は非現実と一蹴されがちである。しかし，成長主義の課題と陥穽の原理的な再検討にあたって有用であるし，その要素のいくつかは現実に適用可能でもある。また関連する思想も，オルターナティブな社会を構想するに当たって深淵かつ示唆に富んでいる。翻訳は訳者の学識に裏付けられた訳注と解説のおかげで理解しやすい。2冊の翻訳を通じて脱成長論の思想的な豊饒さと射程を理解でき，さまざまな分野での議論に役立つことを希望する。

セルジュ・ラトゥーシュ著（中野佳裕訳）『経済成長なき社会発展は可能か？：脱成長とポスト開発の経済学』作品社，2010年，357ページ。（Serge Latouche（2004），*Survivre au développement : De la décolonisation de l'imaginaire économique à la construction d'une société alternative*, Mille et une nuits．Serge Latouche（2007），*Petit traité de la décroissance sereine*, Mille et une nuits.）

セルジュ・ラトゥーシュ著（中野佳裕訳）『脱成長は世界を変えられるか？：贈与・幸福・自律の新たな社会へ』作品社，2013年，318ページ。（Serge Latouche（2010），*Sortir de la société de consommation*, Les liens qui libèrent.）